エッセー

ドキュメンタリー映像「白瀬南極探検隊の記録」制作記

渡 辺 興 亜[1]

南極 OB 会は南極観測に参加した人達の集まりで，その支部の一つに秋田支部がある．

白瀬矗出生の地の支部として，2011〜12 年の白瀬南極探検 100 周年に際し，探検隊の業績を記念する事業を企画している，ついては白瀬南極探検の功績を国内へ発信したい，また国際的にも南極探検史の中での正当な位置づけを求めたい，その方向で協力してもらいたいという要望が南極 OB 会に寄せられた．OB 会ではこれに応えて，「100 周年記念事業委員会」を設け，どう応えるかを検討したのである．

全国発信には何と言っても OB 会の全国に 15 ある地方支部の協力を仰ぐ必要がある．時宜よろしく，北陸支部長の岩坂泰信（金沢大）さんから支部総会を兼ねて講演会を開きたいが良き話題はないかというお尋ねがあった．渡りに船とばかり，石川県は南極探検船「開南丸」船長の野村直吉の出身地であるので，白瀬南極探検を記念し，野村船長を中心にした企画をとお願いしたところ，石川県羽咋市で講演会（2010 年 11 月）が開かれる事になった．地方での講演会では出来ればその地方出身の，あるいは関係のある探検隊員，船員に光を当てた企画をというのが OB 会の方針でもあった．

野村直吉船長は羽咋郡一ノ宮村の出身，慶応 3 年（1867）9 月 7 日に北前船船頭西東（さいとう）家の次男として生まれた．野村直吉「開南丸」船長の人となりと，南極への航海についてが講演会で語られた．彼は 204 噸の機帆船「開南丸」を操り，日本人にとって最初の南極海航海を成し遂げたのである．白瀬南極探検隊を南極に到達させた最大の功績者といっても良いだろう．

北陸支部の講演会を嚆矢として，全国 10 カ所で 100 周年の記念講演会や展示会が企画され，実施された．南極 OB 達の行動力はさすがというべきであろう．

2011 年春の白瀬隊出航 100 周年に合わせて，東京でも講演会が開催されることになった．白瀬南極探検隊には東京出身の隊員，船員は多いのでその中の誰にスポットライトを当てるかは難しい選択であった．

また，白瀬南極探検の業績を国内発信する上で一つの課題があった．それはそもそも白瀬南極探検の実像とは何かである．探検隊長白瀬矗については“偉人像”がそれなりに定着している．偉人話によくあるような逸話も白瀬矗については事欠かない．しかし，今日的な視点から白瀬南極探検を評価する上では，そうした逸話はむしろ本質的なものを隠蔽するマイナス面もあろう．そうした観点からみると，野村船長指揮下の南極航海は実際的であり，記録もかなりの正確さで残されている．「南極記」の記述の一部にみられる航海日誌（ログブック）記述との齟齬はこの辺の事情を物語っている．白瀬南極探検を南極への航海，ロス海での探検航海という観点から見直すという視点は羽咋市での講演会以降，定着しつつあったのである．

探検隊の実像を伝えるドキュメンタリー映像を作りたい，彼らによって撮られた映像，画像によって彼らの実績を伝えるべきという構想が芽生えてきつつあった．こうした背景のもとに，白瀬探検の第 2 次航海に参加し，記録映画を撮影した映写技師田泉保直隊員を中心に，その撮影映像を

1 国立極地研究所名誉教授

ドキュメンタリー化して白瀬南極探検を世に伝えるということが講演会のテーマとなった．やや野心的とは当初，誰しもが思ったことでもある．

100 年前に南極でドキュメンタリー映像を撮るという事は当時としてはまさに時代の先端をゆく企画であったにちがいない．大隈重信探検隊後援会長に頼まれ，田泉技師を南極に送り込んだのは M. パテー商会（1912 年に日活となる）社長梅谷庄吉である．彼は辛亥革命の中心人物となる孫文を支援していた人でもあり，当時の明治時代的高揚した心意気を体現した人でもある．

田泉技師は入社 3 年目の社員で当時 24 歳であった．彼自身は探検参加を必ずしも喜んでいた訳ではないが，給与を 20 倍（80 円）近く上げてもらい，梅谷社長に押し込まれてというのが実情であろう．生命保険の保証額 1 万円という金額は当時の南極行の危険感がよく表れている．

白瀬南極探検隊は田泉技師撮影の約 60 分の記録映像を残している．実際にはこの倍のフイルムが撮影されたそうだが，南極からの持ち帰り時に二通りの保存法を試み，適さなかった半分が全滅したと記録されている．

撮影は英国製のワーウィック（ツァイス・テッサー 50 mm F3.5 レンズ付き）という木製箱形の映写機で行われた．撮影機は三脚を含めて 40 kg 近くあり，数人掛かりの作業だったと記している．

4000 フィート用意したイーストマン・コダックのフイルム感度は ISO10 程度．フイルム 200 フィートを装填し，送りハンドルを左手で回し（8 コマ/秒），絞りは右手で操作するという仕組みである．ファインダーの窓は小さく，白一色の南極では被写体の捕捉，焦点合わせに苦労したそうである．

100 年前に撮影された映像の質は現在の映像とは比べようもない．しかし，撮影機材の性能，撮影操作の困難さのハンディーを越えて，その映像は文化史的にも，南極探検資料としても貴重であることは言うまでもない．

明治 43 年の 11 月 30 日に日本を発った「白瀬南極探検隊」が南極ロス海に到着した頃，既に南極の冬は深まっており，彼らは南極大陸への接近を諦めざるを得なかった．

シドニーに戻った白瀬隊はそこで再挙を期すべく滞在し，日本に資金および物資の調達を依頼した．探検後援会は第 1 次航海の実情を鑑み，探検の目的を当初の南極点到達（少なくとも建前上の）から学術調査に方向転換させ，その一環として当時ようやく実用に近づいていた活動写真による南極自然の撮影を目論んだのである．

残された撮影映像はそのまま編集すればドキュメンタリーとして組み立てられるというほど生易しいものではない．撮影機を据え，動く被写体，ペンギンを延々と撮るといった映像が多いのである．ドキュメンタリー全体の筋書きをどうイメージするかが最初の課題であった．できれば探検隊の行動全体をドキュメンタリー化したいところだが，それに必要な素材のすべてが映像として残されていたわけではない．無いものをどう補完していくか．大筋は探検隊の公式記録である「南極記」の記述の映像化というのが基本計画であった．

ドキュメンタリー制作の基本的方針として，探検隊の撮影映像，写真画像，隊員による描写絵画を中心に，すべて実物のみを素材とし，人工的な映像，画像は一切用いないという方針で準備を進めたが，それは予想を超えた困難さであった．無いものは無いのである．それを越えるには探検隊の行動を徹底的に検討し，探検隊の行動を再評価し，本筋に影響しないように素材の無い事柄を省いていくしかない．

映像は航海中の船内，船外風景，鯨湾定着氷上の行動，棚氷の荷揚げ作業，エドワード VII 世ランド沿いの海氷上行動が主なものである．それらの画像をつなぎ合わせていく上で，実写による鮮明なロス海の海洋，海氷状況がわかる画像が必要であった．こうした映像は 100 年前と変ってはいまい．

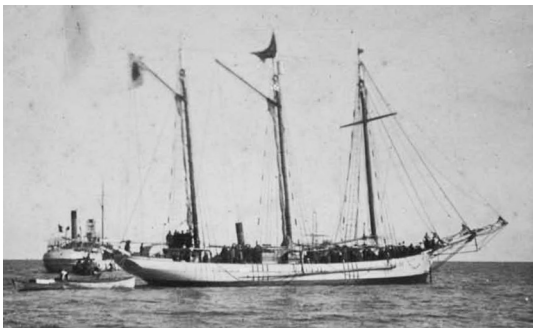
そこで， 2004/2005 年にロス海で海洋生物調査を行った水産庁海洋観測船「開洋丸」の倉持政夫通信長撮影の映像を使わせて頂いた．また，水産総合研究センター遠洋水産研究所の永延幹男さんにはその仲介の労を取って頂いた．こうした素材を基に，シナリオは筆者（渡辺）が起案し，映像の組み立ては斎藤茂男さん（アトリエ風）にお願いした．

2011 年にドキュメンタリー映像「南極探検隊の

記録」を試作し，東京講演会で披露したところ，予想以上の好評を得たので，さらに資料収集に務め，2012 年 3 月，東京で開催した国際講演会で最終完成版の披露にこぎつけることが出来た．特に，白瀬南極探検隊が第 1 次航海で初めて目にした東南極大陸南ビクトリア山脈の山容は探検隊員，船員にとって，おそらく最大の感動を覚えた最初の南極の風景であったにちがいあるまい．そうした思いでその映像を探していたところ，これも「開洋丸」の倉持政夫氏によりご自分の撮影映像から見つけ出していただき，ドキュメンタリーに加えることができた．これにより南極海航海という臨場感をさらに高めることが出来たと思う．

先に述べた南極探検船「開南丸」野村船長が記された「航海記」も記念事業の一環として刊行（「野村直吉船長航海記」2012 年，成山堂）する事ができ，今回制作したドキュメンタリー映像とともに，白瀬南極探検の今日的評価に新しい資料を提供できたのではないかと自負している．

（2012 年 6 月 17 日受付）



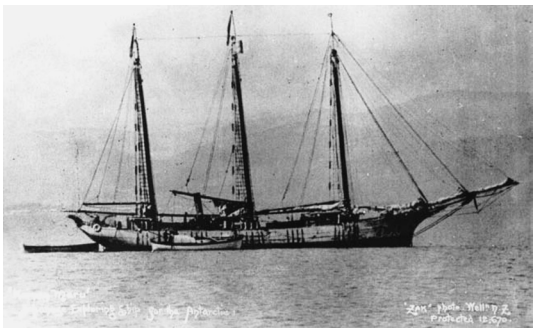


図 1　第一次航海時（左）と第二次航海時の開南丸．開南丸は木造三檣スクーナ船で，第一次航海では通常のスクーナ型縦帆を用いていたが，南極海では一般に風が強く，また操帆が容易なことから第二次航海では三角帆に変更した．（白瀬南極探検隊記念館より提供）

日本最初のドキュメンタリー映像「白瀬南極探検隊の記録」（DVD）および「野村直吉船長航海記」は南極 OB 会から購入（送料込み 3000 円）できます．

申込先：南極 OB 会事務局長谷川慶子宛，Fax, E-mail または郵便で申し込み．

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2，牧ビル 301

Fax：03-5275-1635，E-mail：nankyoku-ob@mbp.nifty.com

ゆうちょ銀行振替口座：「南極 OB 会」00110-1-428672